

西欧の弁論・修辞学概論

奥山 藤志美

1

古典弁論・修辞学（レトリック）という言葉は現代では耳慣れない言葉である。これにはいささか理由がある。この学問はギリシャ・ローマで確立され、いわゆる西洋の学問の伝統の「自由の七学科」の中で論理学と共に枢要な位置を占めていたのが、19世紀になると学校教育でも省みられなくなったという事情にもよるのだ。さらに現代の文章でレトリックという片仮名はしばしば見られるが、その意味するところは漠然として、その適用範囲が多岐にわたっている。曰く、〈文章の構成法〉であったり、〈テーマ〉そのものであったり、〈詞姿〉（figure of speech）、つまり装飾的な語彙選択であったり、多様な文章の型やリズムのことだったり、果ては意味のない大言壮語だったりという、はなはだ好ましからざるものであるからである。

しかし、これらの多義性にわたる弁論・修辞学（レトリック）の概念にも共通の要素がある。これを簡潔に要約するなら「言語の説得的用法」と言うことになるだろうか。そもそもこの言葉の語源のギリシャ語 *rhema* は〈言葉〉という意味であり、この派生語 *rhetor* は「弁論術の教師」のことであることがこの間の事情を物語るであろう。英語の *rhetoric* という名詞はギリシャ語の女性形容詞 *rhetorike* に由来している。これは *rhetorike techne*（字義通りでは「弁論の術」の意）の *techne* がとれた形容詞がそのまま取り入れられたからだ。ただ英語の場合、ギリシャ語から直接ではなく、フランス語の *rhetorique* を経由している。このように語源にあたって見ることは修辞学の元来の意味をつまびらかにしてくれることは確かだ。つまり、人前で「話すこと」、「演説すること」とつながりを持っていることがわかるだろう。

大体、紀元前5世紀のギリシャのポリス社会が起源なのだが、それがローマに受け継がれ、隆盛を極めた。文法、論理学と共に三学科の一画を占めることになるが、主に弁論術に関係した。中世の大学はこれをそっくり踏襲するが、演説の他に〈書簡の技法〉という〈書き言葉〉にも適用され始める。しかし、全面的に〈書き言葉〉に用いられるようになったのは、15世紀の活版印刷術の発明後、すなわちルネッサンス以降のことである。ただ大変興味のあることは現代では古典修辞学の技法は、欧米の大学ではいわゆる文学や文法、言語学を教える人文系の学部でよりも、新興のコミュニケーション関係の学部で重んじられる傾向にあることだ。ここにおいて一種の先祖返りを行っていると言っても良いだろう。

その始まりを歴史的にたどると弁論・修辞学は専ら「説得的な演説の技法」と考えられることは間違いない。従ってその目的は「聴衆をある方法で説得したり、行動に駆り立てること」であった。説得的言辞としての弁論・修辞学は我々現代人にも大いに必要とされるが、アメリカの大学では、これまでこの説得の技術が徹底的に仕込まれることはまれであった。

しばしば現代の大学教育では古典弁論・修辞学の残滓的なものとして、次の

1. 論述的展開法 (argumentation)
2. 解説的展開法 (exposition)
3. 描写的展開法 (description)
4. 物語的展開法 (narration)

の中で1の論述的展開法に主に注意が払われている点だろう。しかし、この展開法は普通大学では論理学の一部門として扱われることがしばしばだった。古典弁論・修辞学にとっては、論理学は補助的なものであるが、いわゆる弁論・修辞学とは別個のものである。例えばアリストテレスは弁論・修辞学を論理学から「枝分かれしたもの、あるいは相補うもの」ととらえている。演説者は聞き手を説得するために〈論理〉を駆使するかもしれないが、其れはあくまで説得の様々な手段の一つに過ぎないと考えるのだ。

今日ではおおむね古典弁論・修辞学は学校の教科科目から姿を消してしまっただが、かつては中心的な科目であり、大変盛んだった時代があった。その理由は、その時代において演説や論述的文章を草する技量が宮廷や法曹界並びに教会社会では昇進の決め手になったからだ。近代から現代に進むにつれて、弁論・修辞学の実践や研究が下火になった理由の一つは、産業・技術社会では言語によるコミュニケーション能力以外の能力（数理能力や専門的な機械に関する知識）でも世に出ることが可能となったからだと言うことが言えよう。

アメリカでは1870年から1910年あたりまで、ほとんど読み書きの満足に出来ない人でも億万長者になるものがあり、彼らの中の何人かは幸いにも読み書きの殿堂である図書館とか大学を設立する資金を寄付するという夢のようなことが起こった。

弁論・修辞学の歴史を概観して気が付くことは、大体弁論・修辞学が注目を浴びるときは、社会が激しく動揺するときだと言うことだ。古い秩序が保てなくなり、新しい価値観が台頭するときには言葉に巧みな人間に役割がまわってくる。ルネッサンス時代のイタリア、宗教改革時代のイギリス、独立戦争時のアメリカという歴史の激動期を想起すれば十分だろう。このような危機の時代には弁舌巧みな人間が時代の寵児になるのだ。名著『イタリア・ルネッサンスの社会と文化』の著者ブルクハルトとが指摘したごとく、中世の頸木をを投げ捨てた15世紀の人文主義運動では、雄弁家や修辞学の専門家が重要な役割を演じている。イギリスではヘンリー8世がローマ・カトリック教会と決別した後、彼の宮廷は没収した修道院の財産の処分をめぐる、法曹家たちの議論が沸騰していた。アメリカ独立時の Tom Paine の扇動的なパンフレット、Patrick Henry の激しい演説、Thomas Jefferson の大胆な独立宣言文等を想起すれば、激動の時代にはいかに口舌の徒がのし上がってくるかが理解できるだろう。現在、これに似た現象が声高に国益を叫ぶ開発途上国の指導者に見られるのも興味深いことである。

まず必要なことは古典修辞学の仕組みの概略とそこで使われる特異な用語の理解だろう。キケロは弁論・修辞学の論文を書くようになった頃、研究・教授に便宜なように、弁論・修辞学を5つの部分に分けていた。即ち

1. Inventio
2. Dispositio
3. Elocutio
4. Memoria
5. Pronuntiatio

である。これらの用語の解説から始めよう。

弁論・修辞学の5つの部門

発想の部

1. Inventio: 英語の invention とか discovery に相当するラテン語。ギリシャ語では heuresis という。理論上は弁論者はいかなる主題に付いても演説することが出来ることになっている。なぜなら弁論・修辞学に固有の主題というものは存在しないからだ。しかし、実際にはこれがなかなかやっかいなのだ。むしろ演説者の力量はこれに挑戦することにあると言っても過言ではない。どんな場合でも、どんな視点からも揺るぎのない論点を見つけなければならないのだ。キケロによると演説者は適切な論点を見つけるためには持ち前の才能、方法、を総動員しなければならないとのこと。明らかに直感的に固有の論点を見つけ出す生来の能力を持っている人は大変に有利な立場にあるのだが、このような才能に恵まれなくとも、たゆむことない努力により、論点（最近の言葉で言えば「切り口」にあたるだろうか）を見つける方法論を身に付ければ対処できると言っている。ここで言う Inventio とは、この論点を見つけ出す方法のことなのである。

2.

アリストテレスは論点または説得の方法には二つの方法があるという。まず第一は非技巧的な説得の術である。これをギリシャ語で *alechnoi pisteis* と呼んでいる。これは弁論・修辞学の一部ではない。これは方法＝術の埒外だからだ。演説者は頭を絞って考え出す必要はなく、単にそれを利用すればいい。彼はこれに属するものとして五つばかりあげている。すなわち、「法律」、「証言」、「契約」、「拷問」それに「宣誓」だ。明らかに裁判において訴訟を担当する法曹家はこの種の証拠をもっとも多く利用する人たちであるが、政治家もこれを使うことは出来る。例えば消費税を導入しようとする政治家は統計とか、法的な契約とか、既

存の法律とか、歴史的な資料とか、はたまた学識経験者の意見とかをよく援用する場合がそれにあたる。彼らはこれらの自説を支える論点をひねり出す必要はない。これはすでに存在しているのだから。ただこれがあるということを覚えていなければならない。そして、それが何処で入手出来るかを知っていなければならない。

アリストテレスが述べている二番目のものは、方法的に考え出されたものである。つまり弁論・修辞学で言う art の領域に属するのである。1, 理性・論理に訴える方法。2, 感情・情緒に訴える方法。3, 道徳・倫理に訴える方法である。

論理的な訴えをするときは演説者は聴衆の理性・悟性に訴える。文字通り「論証する」、「議論」(argue)するのである。この場合には、演繹的な方法と帰納的な方法がある。肯定的な陳述から結論を導くか、それとも否定的な陳述から結論を導くかのいずれかである。

例1、誰もこの人生において完全な幸福など達成できない：太郎は人間である。従って太郎はこの世では完全な幸福は達成できない。

例2、いくつかの類似の事実を観察した後に、一般的な結論を導く方法の例。私のかぶりついた青いリンゴはどれも酸っぱかった。全ての青いリンゴは酸っぱいに違いない。

普通、演繹的な議論の方法を論理学の方では三段論法と呼んでいる。これもアリストテレスが命名したのである。弁論・修辞学で三段論法は enthymene と呼ばれ、普通「省略三段論法」とか、「省略推想法」と訳されている。論理学の帰納法に相当するのが弁論・修辞学では「事例」(example)である。

第二番目の説得の方法は感情に訴えることである。人間の本性は理性的存在故に、私的な事柄でも、公的な事柄においても理性の光に照らして判断を下すべきであるが、しかし、人間は悲しいかな感情や情緒によっても左右される存在でもある。アリストテレスは弁論・修辞学で専ら取り扱うべきは理性への訴えであると言う願望を持っていたが、彼は現実をよく見る人なので、人間はその感情によって駆り立てられたり、感情によってものを受け入れることを知っていた。修辞学とは彼の定義によれば、「全ての説得の手段を見いだすこと」であったので、彼の弁論・修辞学の中で普通の人間の感情の分析を扱った章も入れている。これは心理学の学問としての始まりにあたるだろう。もし演説者が聴衆の感情に訴えることを目論むならば、その感情とはいかなるものか、どうすればその感情を揺り動かすかを知らなければならないのだ。

第三番目の説得の方法は倫理・道徳に訴えるやり方である。これは演説者自身の人柄に由来する。話しには人柄が反映しているから。話し手が信頼されたり、賞賛されたりするのは、知性のある人、慈悲の心のある人、誠実な人という印象を聞き手に与えるからである。アリストテレスはいみじくも言っている。上の三つの説得の方法の中で、もっとも説得力のあるのは、第三番目の倫理・道徳に訴えるやり方であると。感情・情緒に訴えようと躍起になっても、聴衆が話し手を人間として信頼していなければ、水泡に帰するのである。それで後世のキケロもクインテリアンも演説者に高い道徳的モラルを要求しているのも、他ならぬこの理由によるのだ。クインテリアンは理想の演説者を定義して「言葉使いに秀でた徳の高い

人」と言っているくらいだ。

古典修辞学が上述の三つの説得の様式（理性、感情、倫理）を展開する材料を見いだす手助けになるものとして考えられたのが topics という概念である。Topics とはギリシャ語の *topoi*、ラテン語の *loci* の英語訳で、字義通りでは〈場所〉を意味する。例えば *topography* は地形学の意である。修辞学では *topic* とは、ある任意の主題について、述べるべき、議論すべきもの、つまり発想の糸口をまとめておく「場所」、「貯蔵庫」、「宝庫」とみていい。もう少し具体的に言うと、様々な話しの展開をほのめかす、話しの穂口のことである。談話が途切れることなく展開していくきっかけである。言い換えればトピックスとはある主題を展開・発展してゆく様々な可能な方法を見つけるための組織だった方法論のことを指すのである。

アリストテレスはこのトピックスを二つに分けている。すなわち（１）特別のトピックスと (*idioi topoi* とか *eide* と命名している)（２）普通のトピックス (*koinoi topoi* と命名している)。(１)の特別のトピックスは読んで字のごとく特別の言辞に固有のもので、専ら法廷で用いられるものと、公的な演説会場と、儀式的な演説の場合に分けられる。(２)の普通のトピックスはどの種類の談話にも利用可能だが、これにはごく限定された話の展開のレパトリーがあるに過ぎない。アリストテレスは四つ考えている。すなわち １) 多いか、少ないか(程度のトピックス)、２) 可能か不可能か、３) 過去のことか、未来のことか、４) 大きいか、小さいかである。１)と２)を区別して *degree* のトピックスと *size* のトピックスに分けている。

以上が *inventio* の領域に属するのであるが、後の「討議、談話の展開の糸口の発見」の章で詳しく説明することにする。この部分、つまりある主題について、何か語るべきものをよどみなく発想すること、これを方法論的に身につけること。これが弁論・修辞学を習うものにとってもっとも重要な部分なのだ。主題についてどう展開していいかわからないということの主な原因は、その人がそれらの主題について情報を持っていないと言うことで、経験が欠いているか、読書量が足りないのかのいずれかである。すでに持っている情報を吟味して、どう展開してゆかわからないとくどちって>しまうわけだ。このくどちり>をなくすための組織的救済方法が *inventio* と呼ばれる弁論・修辞学の眼目であると言っても過言ではなからう。

弁論・修辞学の第二番の部分は *dispositio* と呼ばれるもので、ギリシャ語では *taxis* といい、英語で言うと '*disposition*'、'*arrangement*'、'*organization*' というものになるだろう。この部分は話し言葉や書き言葉をいかに効果的に、かつ秩序たてて並べるかということに関わる。話しの糸口がつかめたら次々にそれをどのように取捨選択して、聞き手の注意をそらさずに最後まで持って行くかという問題が残っているのである。

単純に図式化すると、〈はじめ〉、〈中〉、〈終わり〉と言うことになる。弁論・修辞学ではここをより詳しく、かつ機能的に分析するわけである。再びアリストテレスは陳述の部分と証明・裏付けの部分だけが言辞の場合にはあると言っている。これが本質的な部分であ

るが、それに付け加えて、導入部と結論部を考えると実際の演説者には大変に役に立つと主張している。ラテン語の弁論・修辞学者になると、さらに細かに分類している。すなわち、1) 導入 *exordium* (introduction), 2) 状況の陳述 *narratio* (statement or exposition of the case under discussion)、3) 論点、問題点、話題の眼目の概要 *divisio* (outline of the points or steps in the argument)、4) 証明、論拠 *confirmatio* (the proof of the case)、5) 予想される反対論に対する論駁 *confutatio* (the refutation of the opposing arguments)、6) 結論 *peroratio* (conclusion)。

このような細かな分類は機械的で、煩瑣であると思われるかも知れない。しかし、これをあえて弁護すれば、二つのことが指摘できるかも知れない。これは明確な組織立てのための原則の必要性を述べているのであって、初心者は材料を並べる際の指針と考えればよい。むしろ弁論・修辞学者はこれに厳密に従うべきだとは言わないし、適度に取り捨選択を許容している。アリストテレスの言う説得のためのあらゆる手段・方法という考え方を容れて、あらゆる部分を省略する場合もある。例えば予想される反論がいくつも出てくる場合は *confutatio* の部分をとってしまうと言う手もあるし、順序を並び代えると言う手もある。例えば自説を前面に出すよりは、想定される反論を論駁していくという消去法などもそれであろう。

明らかに言えることは *inventio* の部分と *dispositio* の部分がお互いに密接に絡み合っているということだろう。この二つの部分を一括して扱っている弁論・修辞学書もあるくらいだ。*Dispositio* は *inventio* の別の面と見なすことも出来る。又 *inventio* の部分は発想の部分に力点を置いているのに、*dispositio* の部分は材料を組織・構成する部分にその主眼点があると言うことも出来よう。

事実、弁論・修辞学の歴史を見ると、16世紀のラメー派並びにフランス・ベーコンは *invention* と *disposition* の部分を論理学で扱うものとして、これを弁論・修辞学から取り除き、その領域を専ら *style* とか *memory* や *delivery* の部分に限定するという動きも出てくるのである。

第三番目の部分が *elocutio* と呼ばれる部分だ。ギリシャ語では *lexis*, *hermenia*, *phrasis* とか言う字が当てられている。さて、ところで *elocution* とする英語は現代では古典弁論・修辞学者が使っていた意味とは異なった意味で使われている。現代ではこの語は話す行為と結びつけられている。例えば *elocution contest* 等というように。この意味はこの語の語源をなすラテン語 *loqui* = “話す” に含意されているが、例えば *loquacious*, *colloquial*, *eloquence*, *interlocation* に見られるように。だが *elocution* とする語がこの現代の意味を持つようになったのは18世紀の後半以降、演説の仕方に対する関心が再燃してからだと言うことを知っておくことは大事なことだ。古典弁論・修辞学者にとっては *elocutio* とは文体 *style* を意味していたのだ。

文体 style とはなかなか定義が難しい。大抵の人はそれは何であるかは漠然と感じているが。有名な文体の定義、例えばビュフォンの「文体は人なり」Style is the man, スイフトの「適切なしかるべき場におけるしかるべき言葉」proper words in proper places とかニューマンの「文体とは思いを言葉に絞り出すこと」style is a thinking out into language, プレアの「人が自分の想念を表現する特異なやり方」the peculiar manner in which a man expresses his conceptions 等はなかなかうまいところを突いているいるが、やはり漠然として一般的過ぎるのである。弁論・修辞学の大家たちはこれまでそれぞれの定義を与えていないが、このことについては大いに言及している。実際、ルネッサンス時代の弁論・修辞学者は専らこの文体のことに費やしていると言っても過言ではない。

ここで問題にされている点は文体 style の分類のことであった。文体の種類についていろいろな語が使われたが、要は三つの文体のレベルがあるということである。＜低い、または簡素な文体＞low or plain な文体、ラテン語では *attemata*, *subtile* という。次に＜中間的なまたは力強い文体＞middle or forcible style, ラテン語では *medeocris*, *robusta* と言う。そして三つ目は＜崇高な、または流ちょうで華やかな文体＞high or florid style ラテン語では *gravis*, *florida* と言う。クインテリアンはそれぞれの文体は弁論・修辞学の三つの機能にふさわしいと述べ、簡潔な文体は人を教え、諭す場合に、中間の文体は人を動かす場合に、そして上位の文体は人を魅惑するのにそれぞれ適切であると提言している。

文体の考察の中には必ず語彙の選択が含まれている。この場合、大体その正確さ *correctness*, 純粹さ *purity* (外来語をなるべく排して、自国語で統一する場合)、簡潔さ *simplicity*, 透明さ、明澄性 *clearness*, 適切さ *appropriateness*, 装飾性 *ornateness* とかの項目に従って論じられている。

次に扱われているのが句や節、文単位の配列の仕方である。(弁論・修辞学の専門用語で *periods* と言う)。シンタクスが正しいか、習慣的な連語はどうか、センテンス・パターンはどうか、平行法とか対照法 (*parallelism*, *antithesis*) 又接続詞の使い方とか、その他文と文、節と節を結ぶ連結語の使い方や、母音や子音を組み合わせる音声的效果等がその中に含まれている。

むろんこれまで比喩的表現法 *tropes figures* に多大の注意が払われてきたことは事実である。(ギリシャ語では *schemata*, 英語では *schemes* のこと)。これは非常に複雑なので章を改めて論ずることにする。

文体 style に関わる議論には、機能的な文体に対して、装飾的な文体とか、口語的な文体に対して文語的な文体とか、豊富な言葉を述べ立てるのに対して無駄を省いて簡潔を旨とする文体とか、古来多くの議論がなされてきた。しかし、これらの議論は今日の修辞学者がこのこといかに時間とエネルギーを費やしてきたかを知るには格好の材料である。

第四番目の弁論・修辞学の項目は＜記憶＞*memoria* (ギリシャ語では *mneme*) であるが、五つの弁論・修辞学の部分の中でもっとも注意が払われなかった部分である、その訳は記憶の過程はもっとも理論的に解明しにくいためだろうと思われる。特に弁論・修辞学が＜書き言

葉>を主に扱うようになると、記憶の部分を問題にする必要がなくなったのだろう。しかし、この過程はかつてソフィストの学校ではかなりの注目を浴びていた。演説者は常に実践を重ねることで記憶力を磨いていた。それはちょうど今日舞台の俳優たちがセリフを諳んじている驚くべき能力を習得しているのと同じである。

第五番目の弁論・修辞学の部分が発話 *pronuntiatio* に当てられている。ギリシャ語では *hypokrisis* と言う。英語では *delivery* に相当する。発話と訳すべきか。Memoria の場合と同様に発話の理論も 18 世紀の中頃になって演説運動が起こってくるようになるまで久しく注目を引かない部分であった。しかし弁論・修辞学者は説明的言辞においては効果的な発話の重要性はよく認めていた。ギリシャ最大の演説家のデモストネスが弁論・修辞学の中で何が一番重要かと尋ねられたとき、彼は「実際に登壇して発話することだよ」と答えている。理論の方面では無視されていたにも関わらず、ギリシャとローマの学校においては、この発話の訓練には意外に多くの時間が割かれていたことは興味深い。実際の発話の技術は理論に耳を傾けるよりも、実際に聴きそれを分析してみることで身に付くということだろうと思う。容易に推察されるように、<記憶>memory の部分と同様にこの<発話>delivery の部分も印刷技術が行き渡るようになると影が薄くなるようである。

<発話>delivery の部分で関わるのが「発声」や「身振り」のやり方で、これをラテン語では *actio* と呼んでいるが「声の高さや量」や「語句の切り方」に関しての様々な教えが扱われている。身振りに関しては、演説家は立った時の姿勢、視線のもって行き方や顔の表情の訓練が課されている。古来歴史に残る大演説家は達者な演技者であったことは意味あることである。

演説の効果を高めるための実際の「発話」delivery の重要性は否定できない。例え周到に準備され、かつ推敲を重ねた原稿をもってしても「発話」delivery が拙いと聞き手の耳には届き難い。書き手は話し手の聞き手と対面しての利点を持っていないのだ。書き手の場合はこの欠点を補うものが<文体>style をいかに鮮やかに演出するかにあると言える。

三つの種類の説得的言辞

一般に修辞学者は演説を三つの種類に分けている。まず英語で *deliberative oratory* と呼ばれるもの。日本語では「審議、検討または討議の演説」とでも訳せようか。政治的課題、助言、忠告的な事柄を扱う演説である。例えば「戦争をやるべきか否か」、「税金をどう徴収すべきか」、「どの国と同盟を結ぶべきか」、「道路を建設すべきか否か」というあらゆる公の政治的問題がこの範疇に入る。これは人々をある行為へと駆り立てるか、意見を受け容れて貰うための演説なのである。アリストテレスによると、全ての政治的演説は「未来」に関わっているということだ。将来、何かをやるか、やらないかを論ずるからである。その特異なトピックスは「的を得ているか」*expedient* であるか、それとも「的を得ていないか」*inexpedient* であるかが焦点になる。その手段、目的は「熱心な勧告、奨励」*exhortation* か、「政策を打ち切る

か」dehortation を画するのである。

二番目は法廷的演説である。つまり、司法、裁判に関わる言説である。法廷において弁護士、検察官、裁判官たちが日常これに携わっている。しかもこの種の言説は司法の場だけではなく、人を弁護したり、非難したりする時にも応用できるものなのだ。再びアリストテレスを引き合いに出すと、この種の演説は概して過去の事象に関わっている。すなわち法廷での裁きは過去に起こった行為や犯罪に関わっているからだ。この種の演説に固有のトピックスは法 justice にかなうか、法にもとるか、つまり injustice かということであり、その手法・目的は告訴すること accusation と弁護すること defence のいずれかである。

第三番目に epideictic oratory と呼ばれるものがくる。集会で意志表明をしたり、宣言文を読み上げたり、人や物を公式に賛辞したり、儀式を執り行ったりする際の言辞である。有名なリンカーンのゲテスバーグでの演説とか独立記念日に国民に結束を訴える大統領の演説がその代表的なものだが、この種の演説の場合は集まった聴衆を説得すると言うよりは「励まし」、「喜ばせる」ということに関わる。これはどうも「現在」に力点が置かれ、その特異なトピックスは honor か dishonor、つまり「褒め称える」か「反対者を非難する」かいずれかである。その目的・手段は賞賛すること praise と非難すること blame である。

古典古代の弁論・修辞学では教会の説教に相当する分野に該当するものを考えていないが、しかし後の中世時代になって、弁論・修辞学がキリスト教文化の中で研究の対象になってくると、説教壇での説教の中に組み入れられるようになる。この場合、説教者は「現在」と言うよりも、人間の「過去」（原罪）と「未来」（最後の審判）を専ら論じられるのだが。

現代における修辞学の意義

これまで古典弁論・修辞学の主要概念を一通り述べてきたが、現代の読者は「これはなかなか興味深いが、それが我々にどのような関わりを持っているか？」という疑問に突きあたるだろう。確かに弁論・修辞学が西欧の学問伝統の中では輝かしい歴史を持っているのはわかるが、この形式張った、古風で格式張った方法は現代の科学技術の発達した時代にそぐわないのではないかという感想を持たれるのも当然だろう。これに対する回答を以下に試みようと思う。

結論から先に言うと、我々はいかなる職業に就いていてもこれ（弁論・修辞学＝レトリック）から逃れることが出来ないのだ。日々の生活において我々は無意識のうちにレトリックを使っているか、それに晒されている。テレビの前に座っていると30分毎にコマーシャルという、人を買物に誘う巧妙な戦術に晒される。そして自分自身も日常知らず知らずそれを駆使しているのだ。うまくいくかどうかは別問題として、例えば恋人をデートに誘うとか、子供が両親に物をねだるとか。逆に両親が子どもたちを上手に勉強させるとかの場面に見られるように。テレビコマーシャルの場合などは、他社の品物と自社の品物の比較を問題にする、いわゆる度合いのトピックスを駆使しているのだ。又子供を勉強に向かわせる動機付

けには因果のトピックス、つまり今勉強しておけば、将来の夢が叶えられるという論理的な説得法が根底にある。

弁論・修辞学は文法や論理学、詩学と同様にそれ自体が先験的学問に属さない。アリストテレスは自分の個室に閉じこもって他人を説得する一連の原理を紡いだのではなく、実際の演説家の行状を観察して、彼らの戦術を分析して、その観察と分析の結果から、他人を説得する技を体系づけていったのである。彼は他の弁論・修辞学者と同様に、人間が本能的にやることは、もし人がそれを意識的にその行動の術を教え込むと、より効果的に行うことが可能であると信じて疑わない。多くのジャズ・ピアニストはレッスンを受けたのではなく、たまたまつま弾いてみたのだが、しかし彼らの中で大成したプレーヤーの誰一人として、もし彼らが音楽学校に行く機会があったら、そして正常な音楽の手ほどきを受けていたら、演奏をよりいい物にすることが出来たかも知れないことを否定する者はないはずだ。

つまりレトリックも同じことで、生来巧みな人はいるが、それを意識的に訓練すれば、より説得力を増すことは確かだ。これは言葉を使う存在としての人間では不可欠なことなのだ。人間とは何にもまして言葉を操る存在なのだから。

四つのレトリックの部分：「提示の部分」exposition, 「議論的展開の部分」argumentation, 「記述的・描写的部分」description, そして「物語的・解説的部分」narration の中もっともしばしば使われ、そして顕著なのは「議論したり、論評したり、個人の意見を述べる部分」つまり argumentation の部分であろう。各個人は他人との関係において存在している限りにおいて、必然的に他人を説得しなければならない立場にある。より正確には「説得したり、説得されたり」というべきだが。母親は子供を、先生は生徒を、店員はお客を、工場長は職工達を説得しなければならないのだ。

文法、論理学そして弁論・修辞学は言語に関する三つの術 arts であるが、一般的にいつてこの言語の術は、今日ではかつてよりもより重要な存在になっている。交通・通信手段の発達には国内並びに国外の人々がより密接に接触することを可能にしているが、このような世の中において他人とどう渡り合うか、つまり自分の思想・信条並びに欲求をどう伝えるか、又いわれない恐怖や不安をどう和らげるか、つまりそれぞれの違いをどう調整するかは、もっとも重要な課題である。ここにレトリックの出番があるといっても過言ではない。核兵器という最終兵器が発明されて以来、人類は破滅の危機に瀕している。並びに価値の多様化が進み、しかもバラバラな個人が都市化された空間の中に密集して住むことから起こる精神的ストレスが昂じているのが現代社会である。これら現代社会を取り巻いている諸問題を言葉を用いて、緊張を和らげ、不安を取り除く役目がますます見直されているのだ。

これを見ても現代社会の様々な分野でレトリックが求められるのは自明であろう。国と国の仲立ちをする外交官とはアタシケースを持って飛び回るレトリシャンと言えるかも知れないし、複雑な人間関係の利害を裁く法曹関係者はまずこの道の達人でなければならないし、営業マンや保険の勧誘員は宣伝的レトリックの達人でなければならない。政治家は将来のヴィジョンを提示して大衆を引っ張っていかなければならない。精神科医でなくと

も、医者たる者すべからく患者の不安を取り除くためには言葉の選択に気を付けなければならないのだ。

ただ、今日レトリックの中でも疑いと嫌悪の念をもって見られる部分がある。それはいわゆるプロパガンダの部分だ。プロパガンダという語はかつては中性的な意味の語で、「真実をまき散らすもの」と言うぐらいの意味を持った言葉だったのだ。ところがある種の間人がプロパガンダを悪い目的のために使ったので、プロパガンダという語は今では好ましかからざる意味を持つようになったのだ。

さらにこれと結びついたのがデマ、つまり demagoguery=悪宣伝、または扇動的行為と言うものである。20世紀に入って、これを巧みに行って政治権力を握った人たちが我々の記憶の中に悪夢のようにこびりついているので、これについて特別な嫌悪感を抱かせるのも当然と言えよう。彼らは公共の利益を増進すると言うよりも、論理をねじ曲げ、詭弁を弄して、真実と言うよりも、噂に近い、あやふやなものをさも真実であるかのごとく、自分に都合の良いように歪曲し、一般大衆の野卑な感情に訴えて、扇動する輩である。これに引っかかると洗脳という恐ろしい現象を生むことになる。これを分析した名著は『1984年』というジョージ・オウエル George Orwell の作品である。真の意味のレトリックを研究することの論拠はこのような悪しきプロパガンダやデマに引っかからないように自らを訓練することだといえよう。

レトリックを学ぶ主なメリットは文章を書くことに対する積極的な問題解決法を学ぶ主な利点は文章を提示することだといってもいいかも知れない。普通「これをしてはいけない」、「これには注意しろ」と言うような消極的なアドバイスに直面して書く意欲をそがれるしまうことが多いのであるが、真のレトリックの目的はむしろ特定の目的のためにある特定の読み手を想定した文章を草する場合はどうすればより効果的かを積極的に教示することだと言って良いだろう。むしろレトリックを学んだからと言って万能な方法を身につけたと言うのではない。しかしレトリックはある特定の状況にふさわしい一般的な法則は提示できる。換言すれば少なくとも文章を書く過程に戦略的な選択を行う指針になる一定の手続きや基準のようなものを教えることは出来るのだ。

レトリックは主に統合的な術（アート）である。つまり何かを「構築する術」である。しかしこれは分析的な術としても使うことが出来る。つまり書いた文章をバラバラに分解するのにも利用可能と言うことだ。この面を推し進めると、レトリックを研究することは我々を良き読み手に導くということになるだろう。

文章を書く技術を習得し、訓練することは必然的に他の書き手達がある効果をねらって書いたものをよりよく分析できる立場にもなるのだ。マルコム・カウリー Malcolm Cowley が指摘したごとく、クレアンス・ブルックス Cleanth Brooks とロバート・ペン・ウオーレン Robert Penn Warren のようなニュー・クリテシズム New Criticism の旗手達はレトリックの諸原則を詩歌の鑑賞に応用した実例を示してくれたし、そしてそれが詩歌の本文を緻密に分析する方法を伝授してくれた。又モーテマー・アドラー Mortimer Adler の『読書術』 How

to Read a Book という本は 1940 年代の大ベストセラーとなった本であるが、この本は散文の解明文 (exposition) と議論文 (argumentative prose) を読み解くテクニックを教えてくださいましたものである。又ウーエン・C・ブース Wayne C. Booth の『小説のレトリック』*The Rhetoric of Fiction* は短編小説や長編小説の中でレトリックがどのようにどのように働いているかをつぶさに我々に示してくれたのである。

格好な例は風刺の分析である。風刺とは本質的にはレトリックの応用である。この場合、古典弁論・修辞学での説得文の意味でのことだが。風刺作家は deliberative rhetoric か ceremonial rhetoric かのいずれかを使っているのだ。つまり彼は究極的には読者のある種の行動に駆り立てようと言う目的で読者の心的態度に影響を与えようとねらっているか、それとも賞賛したり、非難したりして自分の読者に働きかけて、ある人物や一群の人たちを受け入れさせるか、拒絶させるか、いずれかをねらっているのだ。ジョナサン・スウィフト Jonathan Swift の『貧民児童利用策私案』*Modest Proposal* という作品は deliberative rhetoric の一つの具体的な例である。Ceremonial rhetoric の例を見たいならばドライデン John Dryden の『アブサロンとアキとふえる』*Absalom and Achitophel* とかポーブ Alexander Pope の『あびゅすのと博士への書簡』*Epistle to Dr. Arbuthnot* とか『だんしあっど』*The Dunciad* のような作品に見られる彼らの政敵や文学上の競争相手の痛烈な人物描写にまさるものはない。

人は一般に文章を書くことに組織立った方法論を前面に出すと、書くことを促進するよりも、書くことに構えてしまっ、て、創意工夫や創造性を損なうのではないかと言う懸念を抱くかも知れない。方法論が前面に出ることは書き方に慎重さを要求するかも知れないが、しかしこれがいつも書くことに消極的にならせぬとは限らないのだ。イギリスの 18 世紀までの大作家達—チョウサー、ジョンソン、シェクスピア、ミルトン、ドライデン、ポーブ、スウィフト、パーク等はその幼年から少年時代の教育において、古典弁論・修辞学をしっかりと修めたことが彼らを大作家にしたとは言えないまでも、ただこれを修めたことがそうでなかった場合よりも彼らに利したとは言えると思う。古典弁論・修辞学の諸法則を身につけることは、もの書きとして成功する特効薬ではないが、これを自家薬籠中のものにするには確かな第一歩であることは確かなことだ。

雄弁への道は険しく、孤独で気の弱い者にはこの行程は耐えられないかもしれない。しかし言葉を駆使する能力、そしてこれを使っての己の思想や感情を伝達することが出来る能力は人間だけに与えられたもっとも崇高な能力には違いない。人生において言語運用能力を極めることはもっとも誇らしいことなのだ。